

2 教育研究組織

1) 麻布大学3つのポリシー

麻布大学の目的

麻布大学は獣医学、畜産学、動物応用科学、生命科学及び環境科学に関する専門の学術を教授研究し、その応用能力の展開をはかるとともに、人格の完成につとめ、進んで学術の進歩と人類の生活向上に寄与し、平和社会の建設に貢献することを目的とする。

1. ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

獣医学、畜産学、動物応用科学、生命科学及び環境科学の教育に基づき、ICTを活用し、人と動物と環境の共生をめざす専門的知識と技術を習得し、主体的に学び続け、他者と協働して共に成長できる、幅広い視野を持ち国際社会に対して積極的に貢献できる能力を身に付け、所定の単位の修得及び所定の課程を修了して卒業を認めた者に対して、学士の学位を授与する。

2. カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）

麻布大学は、学生にディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）に掲げる専門知識・技術などの実践力及び適切な倫理観を修得させるために、基礎教育あるいは教養教育系科目、専門教育系科目を体系的に編成し、ICTを活用しカリキュラムの充実を図り、講義、演習、実習等を適切に組合わせた授業により主体的・自律的な学習を促す教育を実施する。

3. アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

麻布大学では「学理の討究と誠実なる実践」を建学の精神とし、大学の教育の目的を、獣医学、畜産学、動物応用科学、生命科学及び環境科学に関する専門の学術を教授研究し、その応用能力の展開をはかるとともに、人格の完成につとめ、進んで学術の進歩と人類の生活向上に寄与し、平和社会の建設に貢献することとしている。この目的を達成するために、獣医学部と生命・環境科学部を設置し、そこでは教育理念として「地球共生系『人と動物と環境の共生をめざして』」を掲げて教育研究を実施している。両学部ともに、本学の建学の精神をよく理解し、教育の目的、教育理念に賛同し、明確な目的意識を持ち、主体性をもって多様な人々と協働した学びや自己の成長への強い意欲に溢れ、能動的に貢献する姿勢を持ち、また大学教育を受けるに十分な基礎学力を有する学生を求めている。

2) 獣医学部

獣医学部の理念・目的

獣医学部は、幅広い獣医学及び動物応用科学教育を行い、生命と福祉に関わる科学者としての責任感に基づいて、社会的使命を正しく遂行し得る獣医師及び動物科学の専門家を育成するとの理念に基づき、社会より与えられた責任に対して応えられ、かつ、国際的視野を持つことができる人材を養成することを目的とする。

1. ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) ICTを活用して獣医学及び動物応用科学の一分野についての専門知識と技術、実践力を持ち、動物と人の健康と福祉の維持増進や動物との共生に活用できる。(知識・理解)
- (2) 科学や技術が社会に及ぼす影響を理解し、適切な倫理感を備え、高い視点から、自立的かつ論理的な判断を行うことができる。(倫理感、思考・判断)
- (3) 高度専門技術者あるいは専門技術者として自らの目標を明確に持ち、問題を提起し解決するために必要となる専門知識と技術を自ら修得するために、主体的・自律的に取り組むことができる。(自律性、関心・意欲)
- (4) 多様性のある社会において、幅広い教養や専門知識と技術を総合的に活用しながら、他者と協働して共に成長し、他者のために責任ある行動を取ることができる。(多様性理解、態度)

- (5) 自らの思考・判断の根拠とプロセスを説明し、伝達するためのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力をもつ。(技能・表現)

2. カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

獣医学部では、その理念・目的に基づき、ICTを活用して幅広い教養と専門性を修得し、高い倫理感を身につけた人材を養成するため、獣医学科、動物応用科学科を置き、以下の方針に基づいて、教育課程を編成・実施します。

教育課程編成の方針

- (1) 高等学校までに履修した内容の定着が十分でない学生、あるいは高等学校で履修していない科目群をもつ学生に対して、大学教育への円滑な導入を図るための入門科目群を設置する。
- (2) 幅広い教養と基本的な学習能力の獲得のため、すべての学生が履修する基礎教育科目を配置する。
- (3) 専門知識と技術を体系的に学ぶため、学科の専門科目を、知識と技術の順次性を確保して体系的に設置する。
- (4) 学科の専門分野を超えて、学際的な視点を養う科目を設置する。
- (5) 地域社会や産業界など外界との相互作用を通じて、視野を広げ考えを深める対話的な学びの能力を養う科目を設置する。
- (6) 獲得した知識や技術を統合し、課題の解決と新たな価値の創造につなげていく能力や、主体的かつ自律的な態度を育成するために、概論、特論、ゼミ、卒業論文などの科目を設置する。

実施の方針

- (1) 各授業科目について、到達目標、授業計画と実施方法、成績評価基準等を明確にして、シラバスで周知する。
- (2) 主体的に考える力を育成するために、アクティブラーニング（双方向型授業、グループワーク、発表など）を積極的に取り入れるなど、授業形態、指導方法を工夫する。
- (3) 実践力を涵養するために、ゼミや実習、卒業論文などで授業形態と指導方法を工夫する。
- (4) 成績評価基準に基づき、厳格かつ適正な評価を行う。
- (5) 学位授与方針に基づく学生の学習過程を重視し、在学中の学習成果の全体を評価する。

3. アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

獣医学部の理念・目的を達成するために、次のような資質を持つ人材を求めている。

- (1) 人や動物に対する思いやりの心を持ち、主体性をもって多様な人々と協働し、能動的に社会に貢献する意志を持っている人
- (2) 学習意欲が旺盛で、高等学校までの基礎学力、特に生物・化学を含む理科の学力が十分に備わっている人
- (3) 自ら課題を課し解決できる能力、考える力、判断する力、表現する力が備わっている人

獣医学科の目的

獣医学科では、獣医師としての科学的思考力と応用能力を展開させ、生命と福祉に関わる科学者としての社会的使命を遂行できる能力及び動物の生理や病態、疾病の処置とその予防、並びにヒトと動物の感染症、動物性食品衛生及び環境衛生に関する科学的知識と技術を併せ持つ人材の養成を目的とする。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

本学科に定められたカリキュラムをICTを活用して学修することで、次のような人材が育成されることを目標とする。

- (1) 獣医師としての専門分野の学問内容についての知識を持つ。
- (2) 獣医師として、臨床・家畜衛生・公衆衛生に対応できる専門家としての実践能力を持つ。

- (3) 獣医師としての高い倫理観を有し、高度な専門職業人として責任を持った行動をとることができる。
- (4) 獣医師である高度な専門職業人として、課題発展能力・問題解決能力を持ち、獣医療の進歩や生命科学に関する社会のニーズの変化に、持続的に対応できる柔軟さと学習意欲を持つ。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

本学科では、動物に関する分子生物、細胞、組織、器官および個体レベルの正常な機能についての知識を基盤として、感染症の原因や引き起こす病態、社会への影響、防疫はもちろん、化学物質が生命に及ぼす影響の客観的評価、動物の疾患の原因特定や予防、治療法とその結果の評価に至るまでの広範囲の獣医学知識と技術を身に付けることで、動物の保健衛生の向上ならびに畜産業の発達に貢献し、また公衆衛生の向上に寄与できる人材を育成することを目標とする。このような広範囲な獣医学専門教育を効率よく学修できるようにするため、ICTを活用する。専門教育を、基礎獣医学系（組織・解剖学、生理・生化学）、病態獣医学系（薬理・毒性学、微生物学、病理学、免疫学）、生産獣医学系（家畜衛生学、産業動物臨床学）、臨床獣医学系（小動物臨床学）及び環境獣医学系（公衆衛生学、実験動物学）の5系のカテゴリーに分け、系内及び系外教員との協力体制の下に教育を展開する。

目的に基づき、以下のような特徴あるカリキュラムを編成する。

- (1) 初等年次では、教養から基礎獣医学まで幅広い知識や倫理観を身に付けるために基礎系教員と獣医学系教員の協力による総合的なカリキュラムを設定する。
生物学、細胞生物学、分子生物学、化学、生態学などの学問の理解を通じて生命の基礎となる知識を身に付けるとともに、科学英語やコンピュータ演習を通じて、ICTを活用した情報収集、レポート作成方法を身に付ける。獣医解剖学、組織学、発生学およびこれらの実習を通じて細胞から個体における動物の形態を、また獣医生理学、生化学およびこれらの実習を通じて動物の機能について学ぶ。また教員および社会人として活躍する獣医師による獣医学概論を通じて、獣医師の仕事や責務など、卒業後の自らの姿を低学年から考える素材を提供する。
- (2) 中等年次では、病態獣医学系や生産獣医学系、臨床獣医学系の教員によって、微生物とそれによって引き起こされる病態について学ぶ専門的なカリキュラムを設定する。
寄生虫学、細菌学、ウイルス学を通じて微生物の動物体内での動態や疾病発症、伝染性について理解する。またミクロからマクロレベルの詳細な病態は、獣医病理学で深く理解できるようにする。
- (3) 高等年次では、生産獣医学系、臨床獣医学系、環境獣医学系の教員が中心となり、小動物臨床獣医師、産業動物臨床獣医師、家畜衛生獣医師あるいは公衆衛生獣医師などの獣医師としての専門性を身に付け、実践力を体得するためのカリキュラムを設定し教育している。授業では、基礎獣医学系、病態獣医学系科目で修めた技術や知識を十分応用し、疾病を分子から個体レベルまで理解できるようにする。
生産負荷をかけられる経済動物である牛や馬、豚などの特性や、疾病の発生機序と病態、診断と治療についての知見をもとに、防疫や疾病予防に関する技術と知識を提供する。また、繁殖学では、豚や牛、馬の生殖とその異常、治療法についての技術と知識を提供する。小動物分野では、さまざまな疾病について、内科学総論、臨床病理学、臨床薬理学、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝学、臨床栄養学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、手術学総論、麻酔学、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、画像診断学の立場から診療の技術と知識を提供する。
臨床系の実習においては、学術情報センターのシステムを活用し、学生が学外においてもPCやタブレットを用いて臨床技術の予習および復習を映像にて学び理解できる環境を提供する。
- (4) 問題解決能力を向上させるため、ICTを利用した論文検索で得られた知見や実験等で得られた新知見の集大成として、卒業論文を配置する。
- (5) 獣医師として、社会に巣立つための獣医師ライセンスの取得を目的とした獣医師国家試験対策のために、専門教育5系に属する獣医学系全教員の連携による総合的なカリキュラムを設定する。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

本学科の教育は、獣医師として高い倫理観を有し、高度な専門知識・技術を身に付けて社会に貢献できる人材を養成することを目的にしているため、次のような人物を求める。

- (1) 人や動物、自然が好きな人
- (2) 獣医学に強い関心を持ち、獣医師となることについて明確な目的意識を持っている人
- (3) 獣医師になるための情熱及び他者への思いやりと奉仕の心、高い倫理観を持つ人



● 獣医学科 授業科目

1年次～3年次		1～3年次	2～4年次	2～5年次	2・4～5年次	2～5年次	
基礎教育科目	人文系科目	社会科学系科目	基礎獣医学系	病態獣医学系	生産獣医学系	臨床獣医学系	環境獣医学系
	心理学	現代経済学	細胞生物学	獣医寄生虫学Ⅰ <small>(獣医寄生虫病学を含む)</small>	牧場実習	獣医内科学	実験動物学
	動物比較心理学	法学概論	獣医遺伝学	獣医寄生虫学Ⅱ <small>(獣医寄生虫病学を含む)</small>	獣医栄養学	獣医外科学	実験動物学実習
	文章表現法	現代社会学	獣医解剖学Ⅰ	獣医寄生虫学実習	家禽疫病学	獣医放射線学	獣医公衆衛生学
	総合英語		獣医解剖学Ⅱ	獣医薬理学総論	家畜伝染病学Ⅰ	小動物獣医総合臨床Ⅰ	(総論・食品衛生学)
	職業指導		獣医組織学	獣医薬理学各論	家畜伝染病学Ⅱ	小動物獣医総合臨床Ⅱ	獣医公衆衛生学
	自然科学系科目		獣医発生学	獣医薬理学実習	家畜衛生学Ⅰ	小動物獣医総合臨床Ⅲ	(人獣共通感染症学)
	数学	物理化学概論	獣医解剖学実習	獣医免疫学	家畜衛生学Ⅱ	臨床病理	獣医公衆衛生学実習Ⅰ
	ライフサイエンスの数学Ⅰ	生物学	獣医組織学実習	獣医微生物学総論	獣医臨床繁殖学	基礎・小動物獣医総合臨床Ⅱ	獣医公衆衛生学実習Ⅱ
	ライフサイエンスの数学Ⅱ	生物学実習	獣医生理学Ⅰ	獣医微生物学各論Ⅰ (細菌・真菌)	産業動物獣医総合臨床	基礎・小動物獣医総合臨床Ⅲ	生物統計学
物理学	地学	獣医生理学Ⅱ	獣医微生物学各論Ⅱ (ウイルス)	水生動物疾病学	獣医総合臨床実習	野生動物学	
物理学実験	地学実験	獣医生理学実習Ⅰ	獣医免疫学	基礎・産業動物獣医総合臨床		動物行動学	
化学	地球共生論	獣医生理学実習Ⅱ	獣医微生物学実習Ⅰ			獣医疫学	
化学実験	生態学	分子生物学	獣医微生物学実習Ⅱ				
有機化学	動物分類学	獣医生化学Ⅰ					
複合科目	保健体育科目	獣医生化学Ⅱ					
コンピュータ演習	保健体育	獣医生化学実習					
情報科学技術	基礎体育						
外国語科目							
〈英語〉	〈第二外国語〉						
基礎科学英語	ドイツ語Ⅰ						
英語購読	フランス語Ⅰ						
英作文表現	スペイン語Ⅰ						
	ドイツ語Ⅱ						
	フランス語Ⅱ						
	スペイン語Ⅱ						
自由科目							
生物学入門	化学入門						
地球共生系データサイエンス・同演習Ⅰ							
地球共生系データサイエンス・同演習Ⅱ							
地球共生系サイエンスワーク							
(共通科目)	獣医学概論 獣医療倫理・動物福祉 専門学外実習 獣医関連法規 総合獣医学 獣医学特論Ⅰ 獣医学特論Ⅱ 卒業論文						
	(選択科目)	産業動物臨床基礎実習 獣医畜産管理学 畜産物利用学 飼料原料学 インターンシップ 最新のバイオサイエンス 臨床解剖学 小動物病院実習 産業動物アドバンス実習					

卒業要件		
区分	単位数	累計 GPA
基礎教育科目		1.1 以上
必修	9	
選択必修	6	
選択	23	
専門科目		
必修	146	
選択	5	
計	189	

取得可能学位 学士（獣医学）

動物応用科学科の目的

動物応用科学科では、動物に関わる生命科学を基盤として、人と動物のより良い関係を学び、人と動物の共生を目指して、遺伝子レベルから生態系レベルに至る動物の保有する諸機能を人間生活に安全かつ効果的に活用するための知識と技術を教授し、人と動物に関わる諸分野で活躍できる専門技術を備えた人材の養成を目的とする。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

本学科の定めた教育課程に在籍し、本学科の目的に沿って設定した授業科目を履修し、基準となる単位数を修得することが学位授与の要件である。修得すべき授業科目は、ICTを活用し、講義、演習・実習、フィールド・ワーク、卒業論文等の科目が含まれる。この卒業要件を満たすことで、「動物生命実践的ジェネラリスト」として、主体的に学び続け、他者と協働してともに成長できる、次のような人物が育成されることを目標とする。

DP1 知識・技能

- (1) 動物応用科学における基本的な知識を体系的に理解するとともに、基礎教育等を通じて、広い教養を習得し、豊かな人間性、社会性を身につけ、生命の尊厳を守り社会の中で生じる多様な課題を解決するために必要な知識や技能を身につけていること。

DP2 思考・判断・表現

- (2) 自分の意見を文書や口頭で表現し、それに対する相手の意見を理解することで、さまざまな問題を発見し、他者と良好なコミュニケーションをとりながら解決策を導くことができること。

DP3 態度・志向性

- (3) 動物応用科学科で獲得した知識や技能を活用し、自ら学びを深め、価値観や意見の異なるさまざまな人と協働して社会に役立てることができること。

DP4 総合的な学習経験と創造的思考力

- (4) 獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、科学的根拠に基づいた人と動物と環境の共生に対する論理思考と実証する方法を身につけており、自らが立てた新たな課題に、それらを適用し解決する能力を有していること。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

動物にかかわる職務は世界規模での物資の流通や人間の移動に伴い多様化している。その一方で、業務自体は各々の地域に根ざしたものであることからグローバルな視点を持って地域社会に貢献できることが必要となっている。

本学科ではICTを利用した教育により、主体的・自立的な学習を促す教育によって、専門及び関連分野の幅広い知識力と、地域に根差し現実的課題に対応した実践応用力を備えた「動物生命実践的ジェネラリスト」を育成し、社会で活躍できる人材の輩出を目指す。

そのため、1年次、2年次には、基礎教育的科目群を多く配置する。(DP2、3、4)

同時に、実践的な対応力を養うための専門領域横断的な科目（専門基礎・専門共通）を多く配置し「動物生命実践的ジェネラリスト」の基礎を形成する。(DP1)

3年次、4年次は、研究室に所属しながら動物生命科学系と動物人間関係学系と専門共通系に区分けされた科目群をバランス良く履修することで動物応用科学の研究室に依拠したそれぞれの専門を学びながら領域横断的な科目を学んで「ジェネラリスト」として専門を実践に生かす応用力・問題解決能力を開発する。

動物生命科学系科目群では、遺伝子から、細胞、組織・臓器、微生物、個体、群集、生態系までの種々の段階における生命現象を、保全・増殖、機能解析、利用・開発並びに人と動物に対する安全の観点から、分子から個体までの多様なレベルで総合的に学ぶ。

動物人間関係学系科目群では、伴侶動物、介在動物、野生動物、産業動物を対象に、人の福祉や教育現場に活用できる、動物の特性とその応用及び人と動物と環境の共生について学ぶ。

学年毎には以下のようなカリキュラム進行とした。

- (1) 1・2年次は、動物応用科学が目指す人と動物とのより良い共生のための幅広い科目を配当した。1年次前期から生物学、化学、生態学などで基礎学力を身に付け、その後段階的に専門基礎科目を配当し、動物の形態と機能、動物の特性及び基本的な病態について教育する。また、学科の学問領域を理解するための動物応用科学概論、動物人間共生論、基礎ゼミなどを通じ、動物応用科学の広がりを認識し、修学意欲、社会貢献への意識を高める。
- (2) 3年次以降は、拡大・深化した動物応用科学の諸領域を動物の生命活動とその資源利用・開発に関わる動物生命科学系科目群と、人と動物のより良き共生関係を目指す動物人間関係学系科目群、専門共通系科目群に分け、それぞれをバランス良く学ぶことで領域横断的な能力を養う。
- (3) 4年次には、卒業論文等によりそれぞれの領域における動物応用科学の専門性の追求と、それを基礎とした人間社会への貢献の在り方を学ぶ。

具体的には、社会最先端の実験手法、それを基にした動物機能性製品や新たな動物飼育法、社会調査、フィールド・ワークを体験し、そのデータ解析やレポート作成・口頭発表などを通じて、最新の情報を社会へ発信する能力、社会ニーズに対応するための問題発見・解決能力を身に付けてゆく。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

本学科の目的を理解し、自ら学ぶ姿勢を持ち、本学での学習を通して、主体性を持って多様な人々と協働し、人と動物と社会の接点で社会に貢献できる実践的ジェネラリストとしての能力を身に付け、動物応用科学の諸領域で活躍したいという強い意志と意欲を持った人物を募集する。中でも次のような人物を求めている。

- (1) 問題意識を持ちチャレンジ精神が旺盛である人
- (2) リーダーシップと協調性を有する人
- (3) 動物応用科学の諸領域に主体的に興味を持ち続ける意欲のある人

上記の人物を求めため、一般入試・大学入学共通テスト利用入試を行う。また、思考力・判断力・表現力等の能力、さらに協調性、主体性を持つ人物を選考するため、AO入試、推薦入試を行う。

● 動物応用科学科 授業科目

基礎教育科目		専門科目				
1 年次～3 年次		1～2 年次	2～4 年次	3～4 年次	2～4 年次	3～4 年次
人文科学系科目	社会科学系科目	専門基礎科目	専門共通系科目	専門共通系科目	動物生命科学系科目	動物人間関係学系科目
生命・環境倫理学 心理学 世界文化史	経済学 法学・政治学 現代社会学	(必修科目) 動物応用科学概論 動物応用科学実習 動物機能解剖学 動物人間共生論 動物関連法規 細胞生物学 遺伝生物学 動物生理学 微生物学 分子生物学 動物生化学 動物遺伝学 基礎野生動物学 応用動物行動学 動物資源経済学 動物人間関係学 実験動物学 動物生化学実習 動物解剖・生理学実習 動物生命工学 動物行動神経科学 動物繁殖学 食品科学 動物福祉論 動物病態学 栄養化学 免疫学 社会調査論・キャリア形成 動物薬理学	(選択科目) 牧場実習 動物発生学 進化・分類学 動物管理学 動物分子生殖科学 動物飼養学 バイオインフォマティクス演習 職業指導 インターンシップ 公衆衛生学 動物栄養学実習 食品衛生学 科学の伝達	(必修科目) 動物栄養学 動物衛生学 生物統計学演習 専門ゼミ 卒業論文	(選択科目) 応用動物遺伝学 動物遺伝子工学 遺伝生命科学実習 動物繁殖学実習 実験動物学実習 毒性学 動物細胞工学 動物受精卵移植論 食品製造学 機器分析化学 家畜人工授精特別実習 食品科学実習 毒性学—機器分析実習 動物生殖制御論	(選択科目) 動物行動治療学 介在動物論 動物介在活動・療法演習 野生動物学野外演習 野生動物学 応用動物心理学実習 乗馬応用実習 動物行動管理学実習 動物発達行動学実習 動物資源経済学演習
自然科学系科目						
ライフサイエンスの数学 ライフサイエンスの物理学 物理学実験 化学 有機化学	生物学 生態学 地球共生論 自然科学史 生物学実験 化学実験 地学 地学実験 生物学入門 化学入門					
複合科目	保健体育科目					
スタディ・スキルズ 情報処理論 コンピュータ演習 基礎ゼミ	基礎体育					
外国語科目						
(外国語 A 科目) 基礎科学英語 英語講読Ⅰ 英作文表現Ⅰ 総合・実用英語Ⅰ 総合・実用英語Ⅱ 英語講読Ⅱ 英語講読Ⅲ 英作文表現Ⅱ	(外国語 B 科目) ドイツ語Ⅰ スペイン語Ⅰ ドイツ語Ⅱ スペイン語Ⅱ					
自由科目						
地球共生系データサイエンス・同演習Ⅰ 地球共生系データサイエンス・同演習Ⅱ 地球共生系サイエンスワーク						

卒業要件		
区分	単位数	累計 GPA
基礎教育系科目群		1.1 以上
必修	19	
選択必修	6	
選択	12	
専門基礎・専門共通系科目群	66	
必修	4	
選択	1	
講義	1	
実習・演習	1	
動物生命科学系科目群	4	
必修	1	
選択	3	
講義	1	
実習・演習	2	
動物人間関係学系科目群	4	
必修	1	
選択	3	
講義	1	
実習・演習	2	
計	124	

合計 21 単位以上
(ただし、実習・演習科目から合計 5 単位以上) 修得

取得可能学位 学士 (動物応用科学)

3) 生命・環境科学部

生命・環境科学部の理念・目的

生命・環境科学部は、生命科学及び環境科学の立場から、健全な生命を育むための教育研究を展開し、もって、人の健康の維持増進や環境の安全・保全にかかわる専門性の高い技術者や環境問題に対応できる人材を育成することを目的とする。

1. ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 臨床検査技術学、食品生命科学及び環境科学の一分野について ICT を活用して専門知識と実践力を身につけ、人の健康の維持増進や環境の安全・保全に活用できる。(知識・理解)
- (2) 科学や技術が社会に及ぼす影響を理解し、適切な倫理感を備え、高い視点から、自立かつ論理的な判断を行うことができる。(倫理感、思考・判断)
- (3) 専門技術者として自らの目標を明確に持ち、問題を提起し解決するために必要となる専門知識と技術を自ら修得するために、主体的・自律的に取り組むことができる。(自律性、関心・意欲)
- (4) 多様性のある社会において、幅広い教養や専門知識を総合的に活用しながら、他者と協働して共に成長できる責任ある行動を取ることができる。(多様性理解、態度)
- (5) 自らの思考・判断のプロセスを説明し、伝達するためのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力をもつ。(技能・表現)

2. カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

生命・環境科学部では、その理念・目的に基づき、幅広い教養と専門性を修得し、高い倫理感を身につけた人材を養成するため、臨床検査技術学科、食品生命科学及び環境科学科を置く。各学科では ICT を活用しカリキュラムの充実を図ると共に主体的・自律的な学習を促す教育を実践するために、以下の方針に基づいて、教育課程を編成・実施する。

教育課程編成の方針

- (1) 高等学校までに履修した内容の定着が十分でない学生、あるいは高等学校で履修していない科目群をもつ学生に対して、大学教育への円滑な導入を図るための入門科目群を設置する。
- (2) 幅広い教養と基本的な学習能力の獲得のため、すべての学生が履修する基礎教育科目を配置する。
- (3) 専門知識と技術を体系的に学ぶため、学科の専門科目を、知識と技術の順次性に留意して体系的に設置する。
- (4) 学科の専門分野を超えて、学際的な視点を養う科目を設置する。
- (5) 地域社会や産業界など外界との相互作用を通じて、視野を広げ考えを深める対話的な学びの能力を養う科目を設置する。
- (6) 獲得した知識や技術を統合し、課題の解決と新たな価値の創造につなげていく能力や、主体的かつ自律的な態度を育成するために、概論、ゼミ、卒業論文などの科目を設置する。

実施の方針

- (1) 各授業科目について、到達目標、授業計画と実施方法、成績評価基準等を明確にして、シラバスで周知する。
- (2) 主体的に考える力を育成するために、アクティブラーニング（双方向型授業、グループワーク、発表など）を積極的に取り入れるなど、授業形態、指導方法を工夫する。
- (3) 実践力を涵養するために、ゼミや実習、卒業論文などで授業形態と指導方法を工夫する。
- (4) 成績評価基準に基づき、厳格かつ適正な評価を行う。
- (5) 学位授与方針に基づく学生の学習過程を重視し、在学中の学習成果の全体を評価する。

3. アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

生命・環境科学部は、「生命科学及び環境科学の立場から、健全な生命を育むための教育研究を展開し、もって、人の健康の維持増進や環境の安全・保全に関わる専門性の高い技術者や環境問題に対応できる人材を育成すること」を目的とする。

この目的が達成されるために、次のような資質を持つ人材を求めている。

- (1) 基礎学力を有し、生命科学及び環境科学の学びを通して、自ら課題を見出し、その課題解決のため必要とする知識・技術を習得しようとする学習意欲を持ち、主体性をもって多様な人々と協働する意欲と積極性及び創造性を持っている人
- (2) 高度な専門知識をもって、社会に貢献することに強い意識を持っている人

臨床検査技術学科の目的

臨床検査技術学科は、基礎学力の充実を図り、臨床検査に関する専門知識、技術を習得し、更に高い倫理観を有し、高齢者・障害者医療にも対応可能で、感染症対策、栄養サポート、糖尿病療養指導などのチーム医療を実践する一員としてふさわしい高い能力を有する臨床検査技師を養成する。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 臨床検査で必要となる専門知識と技術を修得し、社会で実践できる能力をもつ。（知識、理解）
- (2) 高い倫理観を持ち、チーム医療の一員として活躍できる能力をもつ。（倫理観）
- (3) 臨床検査により得られた情報と疾患との関連性を正確に把握できる。（思考、判断）
- (4) 臨床検査の専門性を理解し、最新の専門知識と技術を主体的に学び続けることができる。（自律性、関心・意欲）
- (5) 自ら課題を発見し、その解決方法を構築する能力、論理的にプレゼンテーションできるコミュニケーション能力をもつ。（態度、表現）

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

臨床検査技術学科ではその目的に基づき、医療従事者として幅広い教養、高い専門性および倫理観を身につけるため以下の方針に基づいて教育課程を編成・実施する。「臨床検査技師養成教育」に必要な107単位を基本として、主に1～2年次に於いて倫理観を養うための生命倫理学及びキャリア演習、科学英語論文を理解するための基礎科学英語及び医学英語などの教養科目のほか、1年次に於いてICTを活用するスキルを身につけるためのコンピュータ実習などの専門基礎科目を取り入れる。

- (1) 基礎学力並びに専門基礎学力を身につけるために1～2年次の早い時期から解剖学、組織学、生理学、微生物学、生化学、病理学、免疫学、医動物学などの専門基礎科目を必修とする。
- (2) 専門知識と技術を体系的に学ぶため、2～4年次に於いて衛生・公衆衛生学、医用工学概論などの専門基礎科目のほか、検査管理総論、臨床化学、臨床血液学、病理検査学、臨床検査総論、臨床微生物学、臨床病理学、臨床免疫学、輸血・移植検査学・同演習、臨床薬理学、臨床生理学、遺伝子検査学及び臨床検査リスクマネジメントなどの専門科目を展開する。
- (3) 問題解決に取り組む能力や必要なデータを収集し、論理的にプレゼンテーションできる能力を涵養するため、各学生がそれぞれ研究室に所属し、研究テーマを決めて研究活動に必要な知識と手技を習得（文献読解、実験、データ解析、考察及びプレゼンテーション・発表）する卒業論文を2～4年次に配置する。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

日々進歩を遂げている臨床検査医学にあって、命の尊厳を尊重し、臨床検査技師として他の医療従事者と協働しチーム医療の中で活躍できる人を育成するために、次のような人材を求めている。

- (1) 臨床検査技師として医療分野で活躍したい人
- (2) 臨床検査により得られた情報と疾患との関連に興味を持てる人
- (3) 医療の高度化に伴う専門知識と技術を積極的に習得する意欲のある人
- (4) 臨床検査学を身につけるために必要な基礎学力（特に生物と化学）を有する人

● 臨床検査技術学科 授業科目

1 年次～ 4 年次					
教養科目					
教養に係る科目	生命倫理学	地球共生論	基礎化学・分析化学	医療体育	ドイツ語Ⅰ
	心理学	応用数学	基礎生物学	日本語表現法	フランス語Ⅰ
	現代経済学	基礎統計学	地学	基礎英語	医学英語
	日本国憲法	基礎物理学	地学実験	基礎科学英語	薬事関連法規
	労働基準法	物理学実験	基礎教養科学演習	英語講読Ⅰ	
自由科目	地球共生系データサイエンス・同演習Ⅰ・Ⅱ				
	地球共生系サイエンスワーク				
専門基礎科目					
専門に係る科目	キャリア演習	生理学実習	基礎遺伝学	臨床薬理学	
	情報科学概論	生化学	免疫学Ⅰ	生殖生理・不妊症学	
	解剖学・同実習	生化学実習	免疫学Ⅱ	労働生理学Ⅰ	
	組織学・同実習	病理学Ⅰ	免疫学実習	労働生理学Ⅱ	
	コンピュータ実習	病理学Ⅱ	医動物学・同実習	労働安全衛生法Ⅰ	
	基礎化学実験	病理学実習	医用工学概論	労働安全衛生法Ⅱ	
	生物有機化学	微生物学総論	衛生・公衆衛生学Ⅰ	労働衛生Ⅰ	
	生理学Ⅰ	微生物学実習	衛生・公衆衛生学Ⅱ	労働衛生Ⅱ	
	生理学Ⅱ	電子工学概論	衛生・公衆衛生学実習		
	専門科目				
	検査管理総論	病理検査学Ⅱ	臨床病理学	臨床検査リスクマネジメント	
	臨床化学Ⅰ（RI 検査学を含む）	病理検査学実習	臨床免疫学	総合臨床検査学Ⅰ	
臨床化学Ⅱ	臨床検査総論Ⅰ	臨床免疫学実習	総合臨床検査学Ⅱ		
臨床化学実習	臨床検査総論Ⅱ	臨床生理学Ⅰ	総合臨床検査学Ⅲ		
臨床血液学Ⅰ	臨床検査総論実習	臨床生理学Ⅱ	総合臨床検査学演習		
臨床血液学Ⅱ	臨床微生物学Ⅰ	臨床生理学実習	臨床実習		
臨床血液学実習	臨床微生物学Ⅱ	遺伝子検査学	卒業論文		
輸血・移植検査学・同演習	臨床微生物学実習	遺伝子検査学実習			
病理検査学Ⅰ					

卒業要件		
区分	単位数	累計 GPA
必修科目	108	1.1 以上
選択科目	16	
— 教養科目	4	
— 専門科目	12	
計	124	

取得可能学位 学士（保健衛生学）

食品生命科学科の目的

食品生命科学科は、健康な社会を維持・発展させるために、人の公衆衛生及び保健衛生学を基礎として食品科学・栄養学及び衛生学を学び、食の安全・安心に関わるリスク評価と食品の機能性に関わる専門性の高い食品衛生、食品科学及び公衆衛生分野で活躍する幅広い職業人を養成する。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 食品生命科学についての専門的知識と実践力に加え、数理・統計学の知識、情報科学分野のスキルを持ち、食の安全・安心と人の健康の増進に活用し、科学的根拠に基づく情報発信をすることができる。（知識・理解）
- (2) 食の安全・安心と人の健康に関わる生物学・化学的分析技術と知識が社会に及ぼす影響を理解し、適切な倫理観を持ち自立的かつ論理的な判断を行うことができる。（倫理観、思考・判断）
- (3) 食品生命科学に関わる科学実験やその調査結果を解析・評価するために必要となる専門的知識と技術を自ら修得するために、情報通信技術（ICT）を活用して主体的・自律的に取り組むことができる。（自律性、関心・意欲）
- (4) 食の安全・安心と食品の機能性に関わる知識を多様性のある社会において総合的に活用することができ、他者と協働して共に成長できる。（多様性理解、態度）
- (5) 食品生命科学分野において、自らの思考・判断のプロセスを説明伝達するためのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を持ち、ICTを活用して発信することができる。（技能・表現）

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

食品生命科学科では、生命・環境科学部の理念・目的に基づき、幅広く深い教養とともに、食の安全・安心に関わるリスク評価と食品の機能性に関する専門性を修得し、高い倫理感を身につけた人材を養成する。ICTを活用したカリキュラムの充実を図ることにより、食の安全・安心、食の健康、食の情報に関わる教育の効率化を図り、主体的・自律的な学習を促進する。

- (1) 初年度、高等学校までの履修内容の定着が十分でない学生、あるいは高等学校で履修していない科目群を持つ学生に対して、大学教育への円滑な導入を図るための「基礎生物学・同実習」、「基礎化学」、「基礎化学実習」など入門科目群を設置する。
- (2) 全ての学生が履修する基礎教育カリキュラムとして、実社会で活躍する企業人の講義を受け、卒業後に活躍できる分野を想起させることを目標とした「フレッシュャーズセミナー」を配置する。
- (3) 食育教育と食の健康・医療分野への応用（フードアプリケーションサイエンス）と行政機関・食品検査機関への応用（フードレギュラトリーサイエンス）分野の両者の専門科目を体系的に学ぶため、順次性に留意し該当する専門科目を設置する（2－3年）。
- (4) 大学の教育理念である人、動物、環境の共生について理解を深める「地球共生論」を配置し学科の専門分野を超えて学際的な視点を養う。
- (5) 地域社会や産業界との相互作用を通じて、広い視野で対話的な学びの能力を養う科目「インターンシップ」を設置する。
- (6) 卒業論文（3－4年）に取り組むことにより、自らの思考・判断のプロセスを説明し、伝達するためのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力および自律性を身に付ける。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

食品生命科学科では、生命・環境科学部の理念・目的に基づき、幅広く深い教養とともに、食の安全・安心に関わるリスク評価と食品の機能性に関する専門性を持つ人材をICTを活用し育成することを教育理念・目的とする。この目的が達成されるため、次のような資質を持つ人材を求めている。

- (1) 食品生命科学についての専門的知識を学ぶために、高校までの基礎学力（特に、生物、化学、英語、など）を有す

る人。(知識・理解)

- (2) 食の安全・安心と人の健康に関わる問題の解決に科学的に強い興味を持ち、論理的な判断を行うことができる人。(倫理観、思考・判断)
- (3) 食品生命科学に関わる問題を解決するための検証実験や調査に主体的・自律的に取り組むことができる人。(自律性、関心・意欲)
- (4) 主体性を持って多様な人々と協働し、能動的に地域や社会における食の安全・安心と食の健康に関わる問題を身につけた知識やプレゼンテーション・コミュニケーション能力をこれらの解決に役立てたいと考えている人。(多様性、理解、態度、技能・表現)

● 食品生命科学科 授業科目

1 年次～ 4 年次			
教養に係る科目	教養科目		
	フレッシューズセミナー 基礎生物学・同実習 基礎化学 基礎数学 食生活と健康科学 心理学 社会学概論 地球共生論	基礎生物統計学 基礎化学実習 地学 地学実験 食環境論 生命倫理学 日本国憲法 現代経済学	基礎物理学 物理学実験 医療体育 基礎英語 基礎科学英語 英語講読 ライティング基礎 基礎ドイツ語
自由科目	地球共生系データサイエンス・同演習Ⅰ・Ⅱ 地球共生系サイエンスワーク 食品開発 PBL 実習 食のデータサイエンス・同演習		
専門に係る科目	専門科目		
	コンピューター演習基礎 コンピューター演習応用 解剖組織学 解剖組織学実習 有機化学 機器分析学・同実習 分子細胞生物学・同実習 栄養学 栄養学実習 遺伝子工学基礎 微生物学総論 微生物学実習 実験動物学 食品学 食品学実習 生理学 生理学実習 生化学	生化学実習 食品生化学 病原微生物学 病原微生物学実習 公衆衛生学 公衆衛生学実習 食品衛生学 食品衛生学実習 食品分析学 食品分析学実習 病理学 衛生動物学 食中毒科学 薬理学 毒性学 予防医学 食品機能学 食物アレルギー論	公衆栄養学 公衆栄養学実習 疫学概論 食品バイオテクノロジー 応用栄養学 臨床栄養学 環境衛生学 食品加工学・保蔵科学 食品加工学・保蔵科学実習 食品安全学 食のレギュラトリーサイエンス 食品寄生虫学 放射線衛生学 バイオインフォマティクス 衛生行政学 HACCP 管理論 インターンシップ 卒業論文

卒業要件 (必要単位修得数)		
区分	単位数	累計 GPA
必修科目	84	1.1 以上
選択科目	40	
┌ 教養科目	10	
└ 専門科目	30	
計	124	

取得可能学位 学士 (保健衛生学)

環境科学科の目的

環境科学科は、環境を保全し健全な社会を持続的に発展させるために、環境衛生学、環境分析学、環境評価学及び環境保全学を学び、環境問題を正確に把握し対応できる能力を身に付け、これまでに集積された科学技術を有効に活用し、環境保全や社会の持続的発展に貢献できる人材の養成を目的とする。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 健康な環境を創造する意欲や社会に貢献する責任感を持ち、環境の諸問題を解決するために持続的に取り組むことができる。（環境に対する問題意識と愛情を持続する力）
- (2) 環境の問題を正確に捉えるために、理化学的、生物学的、社会学的な調査・分析を行い、環境の実態（環境の健康度）とそのヒト、生態系および社会への影響を正しく評価することができる。（環境問題を発見・分析・把握する力）
- (3) 健全な環境の保護・保全のために、技術的（自然科学）、社会的（社会科学）な知識を用いて、様々な環境の問題を制御・管理し、より健全な環境の創成に取り組むことができる。（環境問題を解決する力）

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

環境科学科では、生命・環境科学部の理念・目的に基づき、ICTを活用したカリキュラムの充実をはかり、幅広い教養とともに、環境問題に関わる自然科学および社会科学に関する専門性を習得し、高い倫理観と環境と人と社会に対する深い愛情を身につけた人材を育成する。

- (1) 1年次には大学生として必要な一般教養と、環境問題を学ぶ上で必須となる自然科学及び社会科学の導入科目を配置する。さらに、コミュニケーション能力を養うために、アクティブラーニングの要素を取り入れた科目を配置する。
- (2) 専門科目においては、環境問題の把握や解決に必要な科学知識などを段階的に習得するように、講義・実習・演習を配置する。
- (3) 環境問題を把握し解決する力を養うために、環境分析、環境衛生、環境評価、環境改善に関する自然科学系科目の講義・演習・実習を配置すると共に、社会科学系科目の講義を配置する。
- (4) 能動的な思考や現実的な解決能力を養うために、卒業論文、課題研究やインターンシップを配置する。
- (5) 化学物質の使用や労働衛生、社会調査に関する資格を取得できるように、必要な科目を配置する。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

健康な環境の創成を目標に、様々な環境の問題を発見し、その問題を解決することに粘り強く取り組める人材を育成するために、次のような人を求めている。

- (1) 化学、生物、英語などの基礎学力を有している人。
- (2) 環境保全や環境問題に強い関心がある人。
- (3) 環境科学やその対策技術について学習意欲がある人。
- (4) 環境科学科の教育理念、教育方針、教育内容等を理解し、環境保全や環境問題解決に貢献する強い意欲を持っている人。

1 年次～ 4 年次

教養に係る科目	一般	基礎人文社会	基礎科学
	フレッシュャーズセミナー 基礎体育	法学入門 社会学概論 人権論 現代経済学 経営学入門 日本国憲法 生命倫理学 SDGs と未来共生科学	コンピュータ概論・同実習 基礎化学 基礎生物学 地学 地学実験 基礎数学 地球共生論 基礎物理学 物理学実験
	語学		
Core I TOEIC A Core I TOEIC B 基礎科学英語	Core II TOEIC A Core II TOEIC B 環境英語	基礎フランス語 基礎ドイツ語	

自由科目
地球共生系データサイエンス・同演習Ⅰ・Ⅱ 地球共生系サイエンスワーク 環境野生動物学 野生動物共生学

専門に係る科目	環境基礎	環境衛生	環境分析
	基礎統計学・同演習 地球環境科学 化学 基礎化学実習 基礎生物学実習 環境生態学 水環境学 大気環境学 微生物学総論 微生物学実習 生化学 環境植物学 科学技術論 生理学 分子細胞生物学・同実習 地域コミュニティ論 環境フィールドスタディ 環境生命科学 環境経済学 科学技術英語	衛生動物学・同実習 公衆衛生学 環境衛生学実習 食品衛生学 水質衛生学 環境衛生学 食品衛生学実習 労働基準法 労働衛生学 放射線衛生学 上水処理工学 労働生理学 労働安全衛生法 環境・病原微生物学 病原微生物学実習 衛生管理学	分析化学 機器分析学・同実習 有機化学 無機化学 環境計量分析学 環境計量分析学実習 環境計量学・同演習
	環境評価	環境保全	発展・展開
社会調査入門 フィールドワーク入門 社会調査法 環境・衛生統計学 環境毒性学 環境毒性学実習 社会調査実習Ⅰ 社会調査実習Ⅱ 環境データサイエンス演習 環境リスク学・同演習 生物多様性フィールドワーク演習	水処理工学実習 環境修復技術論 化学物質安全管理学演習 衛生行政学 下水・産業排水処理工学 廃棄物リサイクル論 建築物衛生管理学・同演習 公害防止管理学・同演習	リサーチローテーション 課題研究Ⅰ インターンシップ 資源エネルギー環境論 環境ビジネス論 課題研究Ⅱ 卒業論文	

卒業要件（必要単位修得数）

区分	単位数	累計 GPA
必修科目	89	1.1 以上
選択科目	35	
┌ 教養科目	16	
└ 専門科目	19 ※ 2	
計	124	

※選択必修科目 6 単位以上及び選択科目 13 単位を含む

取得可能学位 学士（環境科学）

4) 麻布大学大学院3つのポリシー

麻布大学大学院は、麻布大学の建学の精神に則り、本学学部における教育の基礎の上に、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、高い技術力及び研究遂行能力を養い、また、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする。

1. ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

（修士）

動物応用科学、畜産学、生命科学、健康科学、環境科学及び社会科学それぞれの専門領域において、広い視野を持って高度な専門知識及び研究技術並びに科学者としての倫理観を備え、所定の単位を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に対して、修士の学位を授与する。学位を授与される者は、専門性が求められる職業を担うための能力を身に付け、人と動物と環境の共生をめざして、健康社会、食の安全に貢献することができる。

（博士）

獣医学、動物応用科学、畜産学、生命科学、健康科学、環境科学及び社会科学それぞれの専門領域において、深い学識及び卓越した高度な専門知識及び研究技術並びに社会的実践能力を備え、かつ、学術の理論及び科学者としての倫理観を備え、所定の単位を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格した者に対して、博士の学位を授与する。学位を授与される者は、研究者として自立した研究活動ができる、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究・分析・提案能力を身に付け、人と動物と環境の共生をめざして、健全な社会の発展と国際貢献に寄与することができる。

2. カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

麻布大学では、大学院学生に、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）に掲げる高度な専門性を持つ職業人として、獣医学、畜産学、生命科学、健康科学及び環境科学に関する専門的知識及び研究技術などを基盤とした研究能力、課題解決能力、そして科学者としての倫理観を身に付けさせるために、各専攻分野の教育に必要な講義、演習、実習等を適切に組合せた授業を編成し、研究指導する。また幅広くかつ深い学識あるいは学際的な分野の学習の機会を提供するために他研究科・他専攻の授業科目を履修する機会を設け、あるいは全学大学院生を対象にした大学院特別講義を開講している。

3. アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

麻布大学では「学理の討究と誠実なる実践」を建学の精神とし、これに則り、大学院の教育の目的を、本学の教育理念に基づいた学部での教育研究を基盤として、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、高い技術力及び研究遂行能力を養い、また高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を養い、文化の進展を寄与することとしている。この目的を達成するために、獣医学研究科と環境保健学研究科を設置し、教育研究を実施している。両研究科ともに、建学の精神をよく理解し、大学院の教育の目的に賛同し、本学大学院の目指す教育を受けるに相応しい能力・適性を有し、かつ研究意欲が旺盛な者で、大学院教育を受けるに十分な学士課程を修了レベルの幅広い知識と教養を有する学生を求めている。

5) 大学院獣医学研究科

獣医学研究科は、獣医学、動物応用科学を基盤として、動物と人（ヒト）の健康社会・生命科学を探究し、地球上に共存する動物と人（ヒト）に関わる学術の論理及び応用を追究・教授することを理念とする。この理念に基づき、獣医学研究科は、人類と動物の福祉、社会の平和、生物としての共生並びに文化の進展に貢献する人材を育てることを目的とする。

1. ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

獣医学研究科の理念・目的に沿って設定した修士課程又は博士課程の修了要件において、所定の単位を修得し、修士又は博士の学位論文の審査及び最終試験に合格した者に対し、獣医学専攻博士課程にあつては博士（獣医学）、動物応用科学専攻博士後期課程にあつては博士（学術）、同博士前期課程にあつては修士（動物応用科学）の学位を、それぞれ授与する。学位を授与される者は、幅広い視野に立った学識を有し、獣医学又は動物応用科学に関する専門的知識及び研究技術を持ち、人類と動物の健康社会に貢献する研究者及び教育者、又は高度な専門性を持つ職業人として社会に貢献できる能力を身に付けている。

2. カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

獣医学研究科の理念・目的を実現するよう、専門分野や専攻科目の枠を超えた幅広い共通科目及び研究指導體制を組む。その上で、獣医学及び動物応用科学に関する各専門分野及び専攻科目において、特色ある講義、演習及び実験・実習によって、より深い専門的知識を習得するコースワークと、研究者として自立した研究活動を行い、高度な専門性を持つ職業人として必要な研究能力及び豊かな学識が身に付けられるように適切に配慮したリサーチワークのカリキュラムを編成する。

研究者として必要な研究倫理、課題解決能力、論理的思考力及び科学的な課題設定能力を養わせ、並びに学術発表及び質疑応答等を通じてプレゼンテーション能力や国際感覚が備わるようにする。

3. アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

獣医学研究科の理念・目的を達成するために、次のような資質を持つ人材を求めている。

- (1) 獣医学・動物応用科学に関連する諸科学の基礎知識を備えており、かつ国際化に対応できるだけの語学力を備えている人
- (2) 人類と動物の健康社会・生命科学の研究領域に関する深い探求心を持つ人
- (3) 高度な専門性を持つ職業人としての意識も持ち、国内外問わず広い視野を持って社会的使命に柔軟に応えることができる人

獣医学専攻の目的

獣医学専攻では動物とヒトの生命科学として、より高度な臨床獣医師や高度の専門性を有する職業人、研究者及び教育者を養成するため、問題解決能力、実践・実務能力を重視した教育研究体制を組織する。また、獣医学専攻では、ヒトの健康に寄与することも考慮し、主として、予防獣医学、遺伝子診断、遺伝性疾患、免疫治療、移植、感染症、臨床薬理、臨床中毒、臨床病理、病態病理及びバイオインフォマティクスなどの幅広い研究・教育を通して、より専門性の高い研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。

● 獣医学専攻博士課程

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 博士課程にあつては、所定の修業年限である4年以上在学し、必修20単位、選択10単位計30単位以上を修得し、必要な研究指導を受け、かつ、博士論文を提出した者について行う学位論文の審査（ループリック評価）及び最終試験に合格した者に、博士（獣医学）の学位を与える。
- (2) ただし、博士課程に3年以上在学し、定められた授業科目につき課程修了必要単位を修得し、かつ、特に優れた研究業績を上げ、指導教員を含む3人以上の本研究科教授会構成員が推薦し、博士論文を提出した者について行う学位論文の審査及び最終試験に合格した者には、修業年限の特例により博士（獣医学）の学位を与える。
- (3) また、博士課程修了にあつては、以下の水準に到達していることを目安とする。

- 1) 幅広い視野に立った学識を有し、それぞれの専門領域における高度な学識（専門的知識と見識）並びに研究技術を習得している。さらに、その学識と研究技術に基づいて独自に課題を設定し、それを解決・展開できる能力を身に付けている。
- 2) 必要に応じて他の研究者及び研究機関との連携を図ることができる能力を身に付けている。
- 3) 研究成果を国際的に公表するために必要な英語でのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力及び論文作成能力を身に付けている。

上記3点の能力を通じて、獣医学における高度な専門性を持つ職業人、研究者及び教育者として社会に貢献できるようにする。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

- (1) 専門分野や専攻科目の枠を超えた幅広い学識を共通科目の講義により習得させる。
- (2) 獣医学に関する専攻科目の専門的知識を、各専攻科目に配当された授業科目の講義、演習並びに実験・実習により習得させる。
- (3) それぞれの指導教員との討論のもとで、自ら主体的に各分野の先端的な研究課題に取り組み、博士論文としてまとめる。これにより、課題解決方法、論理的思考、発展的な課題設定方法についてより深く学ばせる。
- (4) 研究成果を学内の課程博士論文中間発表及び論文発表会で発表させるとともに、国内外の学会及び学術誌において発表することを支援する。これにより、日本語のみならず、英語を始めとする外国語でのプレゼンテーション及び質疑応答能力を養わせる。また、対外的な評価を受けることで、自己の研究能力を客観的に評価する機会を与える。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

獣医学専攻博士課程では、より高度な専門性を持つ職業人、研究者及び教育者の養成を目指す。そのために次のような人物を求めている。

- (1) 獣医学に関連する諸科学の基礎知識を持ち、かつ、国際的な視点を持ち合わせている人
- (2) 獣医学に関する新たな知識の創造及び新技術の開発に取り組み、それによって人類と動物の健康維持に貢献しようとする意識のある人
- (3) 獣医学にとどまらず、新たな学際的な研究領域に対しても果敢に挑戦しようとする意欲を持っている人

● 獣医学専攻 分野・専攻科目と授業科目〈博士課程〉

分野	専攻科目	研究領域	授業科目	単位数	分野	専攻科目	研究領域	授業科目	単位数
動物構造機能学	生体構造学	獣医解剖学	獣医解剖学特論	2	動物疾病制御学	生体疾病制御学	獣医病理学	獣医病理学特論	2
			獣医解剖学特別演習Ⅰ	2				獣医病理学特別演習Ⅰ	2
			獣医解剖学特別演習Ⅱ	2				獣医病理学特別演習Ⅱ	2
			獣医解剖学特別演習Ⅲ	2				獣医病理学特別演習Ⅲ	2
			獣医解剖学特別実験Ⅰ	3				獣医病理学特別実験Ⅰ	3
			獣医解剖学特別実験Ⅱ	3				獣医病理学特別実験Ⅱ	3
			獣医解剖学特別実験Ⅲ	3				獣医病理学特別実験Ⅲ	3
	獣医解剖学特別実験Ⅳ	3	獣医病理学特別実験Ⅳ	3					
	獣医組織・発生学	獣医組織・発生学	獣医組織・発生学特論	2		獣医薬理学	獣医薬理学	獣医薬理学特論	2
			獣医組織・発生学特別演習Ⅰ	2				獣医薬理学特別演習Ⅰ	2
			獣医組織・発生学特別演習Ⅱ	2				獣医薬理学特別演習Ⅱ	2
			獣医組織・発生学特別演習Ⅲ	2				獣医薬理学特別演習Ⅲ	2
獣医組織・発生学特別実験Ⅰ			3	獣医薬理学特別実験Ⅰ	3				
獣医組織・発生学特別実験Ⅱ	3	獣医薬理学特別実験Ⅱ	3						
獣医組織・発生学特別実験Ⅲ	3	獣医薬理学特別実験Ⅲ	3						
獣医組織・発生学特別実験Ⅳ	3	獣医薬理学特別実験Ⅳ	3						
分子生物学	分子生物学	分子生物学特論	2	獣医微生物学	獣医微生物学	獣医微生物学特論	2		
		分子生物学特別演習Ⅰ	2			獣医微生物学特別演習Ⅰ	2		
		分子生物学特別演習Ⅱ	2			獣医微生物学特別演習Ⅱ	2		
		分子生物学特別演習Ⅲ	2			獣医微生物学特別演習Ⅲ	2		
		分子生物学特別実験Ⅰ	3			獣医微生物学特別実験Ⅰ	3		
		分子生物学特別実験Ⅱ	3			獣医微生物学特別実験Ⅱ	3		
		分子生物学特別実験Ⅲ	3			獣医微生物学特別実験Ⅲ	3		
分子生物学特別実験Ⅳ	3	獣医微生物学特別実験Ⅳ	3						
獣医生理学	獣医生理学	獣医生理学特論	2	感染症学	感染症学	感染症学特論	2		
		獣医生理学特別演習Ⅰ	2			感染症学特別演習Ⅰ	2		
		獣医生理学特別演習Ⅱ	2			感染症学特別演習Ⅱ	2		
		獣医生理学特別演習Ⅲ	2			感染症学特別演習Ⅲ	2		
		獣医生理学特別実験Ⅰ	3			感染症学特別実験Ⅰ	3		
		獣医生理学特別実験Ⅱ	3			感染症学特別実験Ⅱ	3		
		獣医生理学特別実験Ⅲ	3			感染症学特別実験Ⅲ	3		
獣医生理学特別実験Ⅳ	3	感染症学特別実験Ⅳ	3						
獣医生化学	獣医生化学	獣医生化学特論	2	寄生虫学	寄生虫学	寄生虫学特論	2		
		獣医生化学特別演習Ⅰ	2			寄生虫学特別演習Ⅰ	2		
		獣医生化学特別演習Ⅱ	2			寄生虫学特別演習Ⅱ	2		
		獣医生化学特別演習Ⅲ	2			寄生虫学特別演習Ⅲ	2		
		獣医生化学特別実験Ⅰ	3			寄生虫学特別実験Ⅰ	3		
		獣医生化学特別実験Ⅱ	3			寄生虫学特別実験Ⅱ	3		
		獣医生化学特別実験Ⅲ	3			寄生虫学特別実験Ⅲ	3		
獣医生化学特別実験Ⅳ	3	寄生虫学特別実験Ⅳ	3						

分野	専攻科目	研究領域	授業科目	単位数	分野	専攻科目	研究領域	授業科目	単位数
動物疾病制御学	生体疾病制御学	獣医免疫学	獣医免疫学特論	2	獣医臨床科学	獣医診断治療学	獣医内科学	獣医内科学特論	2
			獣医免疫学特別演習Ⅰ	2				獣医内科学特別演習Ⅰ	2
			獣医免疫学特別演習Ⅱ	2				獣医内科学特別演習Ⅱ	2
			獣医免疫学特別演習Ⅲ	2				獣医内科学特別演習Ⅲ	2
			獣医免疫学特別実験Ⅰ	3				獣医内科学特別実験Ⅰ	3
			獣医免疫学特別実験Ⅱ	3				獣医内科学特別実験Ⅱ	3
			獣医免疫学特別実験Ⅲ	3				獣医内科学特別実験Ⅲ	3
			獣医免疫学特別実験Ⅳ	3				獣医内科学特別実験Ⅳ	3
	生体機能制御学	実験動物学	実験動物学特論	2			獣医外科学	獣医外科学特論	2
			実験動物学特別演習Ⅰ	2				獣医外科学特別演習Ⅰ	2
			実験動物学特別演習Ⅱ	2				獣医外科学特別演習Ⅱ	2
			実験動物学特別演習Ⅲ	2				獣医外科学特別演習Ⅲ	2
実験動物学特別実験Ⅰ	3	獣医外科学特別実験Ⅰ	3						
実験動物学特別実験Ⅱ	3	獣医外科学特別実験Ⅱ	3						
実験動物学特別実験Ⅲ	3	獣医外科学特別実験Ⅲ	3						
実験動物学特別実験Ⅳ	3	獣医外科学特別実験Ⅳ	3						
獣医環境科学	獣医環境制御学	家畜衛生学	獣医栄養学特論	2	臨床繁殖学	臨床繁殖学特論	2		
			獣医栄養学特別演習Ⅰ	2		臨床繁殖学特別演習Ⅰ	2		
			獣医栄養学特別演習Ⅱ	2		臨床繁殖学特別演習Ⅱ	2		
			獣医栄養学特別演習Ⅲ	2		臨床繁殖学特別演習Ⅲ	2		
			獣医栄養学特別実験Ⅰ	3		臨床繁殖学特別実験Ⅰ	3		
			獣医栄養学特別実験Ⅱ	3		臨床繁殖学特別実験Ⅱ	3		
	獣医栄養学特別実験Ⅲ	3	臨床繁殖学特別実験Ⅲ	3					
	獣医栄養学特別実験Ⅳ	3	臨床繁殖学特別実験Ⅳ	3					
	獣医環境科学	獣医環境科学	公衆衛生学	公衆衛生学特論	2	応用動物科学	応用動物科学	応用動物科学特論	2
				公衆衛生学特別演習Ⅰ	2			応用動物科学特別演習Ⅰ	2
				公衆衛生学特別演習Ⅱ	2			応用動物科学特別演習Ⅱ	2
				公衆衛生学特別演習Ⅲ	2			応用動物科学特別演習Ⅲ	2
公衆衛生学特別実験Ⅰ				3	応用動物科学特別実験Ⅰ			3	
公衆衛生学特別実験Ⅱ				3	応用動物科学特別実験Ⅱ			3	
公衆衛生学特別実験Ⅲ	3	応用動物科学特別実験Ⅲ	3						
公衆衛生学特別実験Ⅳ	3	応用動物科学特別実験Ⅳ	3						
共通	共通科目	共通領域	動物科学特論Ⅰ	2				動物科学特論Ⅰ	2
			動物科学特論Ⅱ	2			動物科学特論Ⅱ	2	
			動物科学特論Ⅲ	2			動物科学特論Ⅲ	2	

備考

所属している研究領域の特論、特別演習及び特別実験（計20単位）を必修とし、他の研究領域の授業科目から10単位以上を選択し、合計30単位以上を履修する。ただし、応用動物科学研究領域の授業科目は選択できない。

卒業要件（必要単位修得数）	
区分	単位数
必修	20
選択	10
計	30

※所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、学位論文審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。

取得可能学位 博士（獣医学）

動物応用科学専攻博士前期課程の目的

動物応用科学専攻博士前期課程では、日本社会の実情にあった、人と動物の健康社会を科学する人材を養成するため、動物、微生物などに由来する遺伝子、細胞、タンパク質などの機能解析とその応用、食品科学における危険要因の低減、除去及び生理活性マテリアルとしての環境改善への応用、更に「健康な動物」の持つ機能の人間生活への活用、野生動物の保全・人間社会との軋轢の軽減などの研究・教育を通して、高度な専門性職業人に必要な能力を養うことを目的とする。

●博士前期課程（修士課程）

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 博士前期課程（修士課程）にあつては、所定の修業年限である2年以上在学し、必修・選択両科目を併せて30単位以上を修得し、必要な研究指導を受け、かつ、修士論文を提出した者について行う学位論文の審査及び最終試験に合格した者に、修士（動物応用科学）の学位を与える。
- (2) ただし、博士前期課程（修士課程）に1年以上在学し、所定の課程修了必要単位数を修得し、かつ、特に優れた研究業績を上げ、指導教員を含む3人以上の本研究科教授会構成員が推薦し、修士論文を提出した者について行う学位論文の審査（ルーブリック評価）及び最終試験に合格した者には、修業年限の特例により修士（動物応用科学）の学位を与える。
- (3) 博士前期課程（修士課程）修了に当たっては、以下の水準に到達していることを目安とする。
 - 1) 幅広い視野に立った学識を有し、動物、微生物などに由来する遺伝子、細胞、タンパク質などの機能解析とその応用、食品科学における危険要因の低減、除去及び生理活性マテリアルとしての環境改善への応用、更に「健康な動物」の持つ機能の人間生活への活用、野生動物の保全・人間社会との軋轢の軽減などの研究領域に関する高度な専門知識を習得している。
 - 2) それぞれの専門領域における科学的な課題設定方法、論理的思考、各分野の先端的知識の収集及び実験手法など基本的な研究技術を習得している。
 - 3) それぞれの研究成果を学会等において公表するために必要なプレゼンテーション能力及びコミュニケーション能力を身に付けている。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

- (1) 専門分野や専攻科目の枠を超えた幅広い学識を共通科目の講義により習得させる。
- (2) 動物応用科学に関する専攻科目の専門的知識を、各専攻科目に配当された授業科目の講義、演習並びに実験・実習により習得させる。
- (3) それぞれの指導教員のもとで、研究指導を受けながら研究課題に積極的に取り組み、修士論文としてまとめる。これにより、科学的な課題設定方法、論理的思考、各分野の先端的知識及び実験手法について学ばせる。
- (4) 研究成果を学内の課程修士論文中間発表及び論文発表会で発表させるとともに、学外の学会等において発表することを支援する。これにより、プレゼンテーション及び質疑応答能力を養わせる。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

博士前期課程（修士課程）では、人と動物の健康社会を科学する高度な専門性職業人の養成を目指す。そのために次のような人物を求めている。

- (1) 学部の専門にかかわらず、人と動物の健康を科学する動物応用科学の基礎となる生物学、化学の基礎知識を持ち、かつ、国際化に対応できるだけの語学力を備えている人
- (2) 動物応用科学に強い関心を持ち、新しい知識の吸収意欲があり、かつ、それらの知識を科学的発見及び問題解決に結びつけようとする意識のある人
- (3) 動物応用科学の社会的使命をよく認識し、リーダーシップと協調性を持って問題解決に果敢に挑戦しようとする意欲を持っている人

●動物応用科学専攻 分野・専攻科目と授業科目〈博士前期課程〉

分野	専攻科目	授業科目	単位数	分野	専攻科目	授業科目	単位数
動物生命科学	動物資源育種学	動物生理遺伝学特論	1	動物行動管理学	応用動物行動学特論Ⅰ	1	
		動物資源制御学特論	1		応用動物行動学特論Ⅱ	1	
		動物資源工学特論	1		応用動物管理科学特論Ⅰ	1	
		動物ゲノム解析学特論	1		応用動物管理科学特論Ⅱ	1	
		動物生命科学特別演習Ⅰ-Ⅰ	2		動物共生科学特別演習Ⅰ-Ⅰ	2	
		動物生命科学特別演習Ⅰ-Ⅱ	4		動物共生科学特別演習Ⅰ-Ⅱ	4	
		動物生命科学特別研究Ⅰ-Ⅰ	6		動物共生科学特別研究Ⅰ-Ⅰ	6	
	動物生命科学特別研究Ⅰ-Ⅱ	8	動物共生科学特別研究Ⅰ-Ⅱ		8		
	動物生殖科学	動物生殖科学特論Ⅰ	1	野生動物学	野生動物学特論Ⅰ	1	
		動物生殖科学特論Ⅱ	1		野生動物学特論Ⅱ	1	
		動物生殖制御学特論	1		保全生態学特論Ⅰ	1	
		低温細胞生物学特論	1		保全生態学特論Ⅱ	1	
		動物生命科学特別演習Ⅱ-Ⅰ	2		動物共生科学特別演習Ⅱ-Ⅰ	2	
		動物生命科学特別演習Ⅱ-Ⅱ	4		動物共生科学特別演習Ⅱ-Ⅱ	4	
		動物生命科学特別研究Ⅱ-Ⅰ	6		動物共生科学特別研究Ⅱ-Ⅰ	6	
	動物生命科学特別研究Ⅱ-Ⅱ	8	動物共生科学特別研究Ⅱ-Ⅱ		8		
	動物工学	動物工学特論Ⅰ	1	介在動物学	動物人間関係学特論Ⅰ	1	
		動物工学特論Ⅱ	1		動物人間関係学特論Ⅱ	1	
		発生・生殖生物学特論	1		動物観比較文化特論	1	
		遺伝子科学特論	1		動物介在療法特論	1	
		動物生命科学特別演習Ⅲ-Ⅰ	2		動物共生科学特別演習Ⅲ-Ⅰ	2	
		動物生命科学特別演習Ⅲ-Ⅱ	4		動物共生科学特別演習Ⅲ-Ⅱ	4	
		動物生命科学特別研究Ⅲ-Ⅰ	6		動物共生科学特別研究Ⅲ-Ⅰ	6	
	動物生命科学特別研究Ⅲ-Ⅱ	8	動物共生科学特別研究Ⅲ-Ⅱ		8		
比較毒性学	比較毒性学特論Ⅰ	1	伴侶動物学	動物神経科学特論Ⅰ	1		
	比較毒性学特論Ⅱ	1		動物神経科学特論Ⅱ	1		
	環境毒性学特論	1		動物社会認知学特論	1		
	実験腫瘍学特論	1		動物発達行動学特論	1		
	動物生命科学特別演習Ⅳ-Ⅰ	2		動物共生科学特別演習Ⅳ-Ⅰ	2		
	動物生命科学特別演習Ⅳ-Ⅱ	4		動物共生科学特別演習Ⅳ-Ⅱ	4		
	動物生命科学特別研究Ⅳ-Ⅰ	6		動物共生科学特別研究Ⅳ-Ⅰ	6		
動物生命科学特別研究Ⅳ-Ⅱ	8	動物共生科学特別研究Ⅳ-Ⅱ		8			
食品科学	食品科学特論Ⅰ	1	動物資源経済学	動物資源経済学特論Ⅰ	1		
	食品科学特論Ⅱ	1		動物資源経済学特論Ⅱ	1		
	畜産物利用学特論	1		動物産業経済学特論Ⅰ	1		
	応用微生物学特論	1		動物産業経済学特論Ⅱ	1		
	動物生命科学特別演習Ⅴ-Ⅰ	2		動物共生科学特別演習Ⅴ-Ⅰ	2		
	動物生命科学特別演習Ⅴ-Ⅱ	4		動物共生科学特別演習Ⅴ-Ⅱ	4		
	動物生命科学特別研究Ⅴ-Ⅰ	6		動物共生科学特別研究Ⅴ-Ⅰ	6		
動物生命科学特別研究Ⅴ-Ⅱ	8	動物共生科学特別研究Ⅴ-Ⅱ		8			
基礎生命科学	基礎生命科学特論Ⅰ	1	動物倫理・文化学	動物倫理学特論Ⅰ	1		
	基礎生命科学特論Ⅱ	1		動物倫理学特論Ⅱ	1		
	基礎細胞生物学特論Ⅰ	1		動物文化史特論Ⅰ	1		
	基礎細胞生物学特論Ⅱ	1		動物文化史特論Ⅱ	1		
	動物生命科学特別演習Ⅵ-Ⅰ	2		動物共生科学特別演習Ⅵ-I	2		
	動物生命科学特別演習Ⅵ-Ⅱ	4		動物共生科学特別演習Ⅵ-II	4		
	動物生命科学特別研究Ⅵ-Ⅰ	6		動物共生科学特別研究Ⅵ-I	6		
動物生命科学特別研究Ⅵ-Ⅱ	8	動物共生科学特別研究Ⅵ-II		8			
動物応用医科学	動物応用医科学	動物応用医科学特論Ⅰ	2	動物応用医科学	動物応用医科学特論Ⅰ	2	
		動物応用医科学特論Ⅱ	2		動物応用医科学特論Ⅱ	2	
共通	共通	動物応用医科学特別演習Ⅰ	4	共通必修科目	アカデミックプレゼンテーション	2	
		動物応用医科学特別演習Ⅱ	4	共通選択科目	動物科学特論	2	
		動物応用医科学特別研究Ⅰ	6		英語特別演習	2	
		動物応用医科学特別研究Ⅱ	8				

必修科目について：所属している専攻の科目で特別演習と特別研究の計20単位、同専攻の特論から2単位及び共通必修科目2単位、計24単位とする。

ただし、動物応用医科学専攻は、動物応用医科学特論Ⅰを必修とする。
選択科目について：所属している専攻の科目で必修として履修していない特論及び他専攻の特論並びに環境保健学研究科の特論及び共通選択科目（ただし、自由科目を除く。）から計6単位以上を選択することとはできない。

ただし、動物応用医科学特論Ⅰ及び動物応用医科学特論Ⅱを選択することはできない。
麻布大学学則第34条の2に基づいて早期履修した授業科目のうち、選択科目として単位に充当できない授業科目は、自由科目として単位に充当する。

動物応用科学専攻 博士前期課程

卒業要件（必要単位修得数）	
区分	単位数
必修	24
選択	6
計	30

※所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、学位論文審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。

取得可能学位 修士（動物応用科学）

動物応用科学専攻博士後期課程の目的

動物応用科学専攻博士後期課程では、博士前期課程（修士課程）で修得した広い視野に立って、より高度な専門性をもつ職業人、研究者及び教育者を養成するため、人と動物健康科学などの研究・教育を通してその学術的基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。

●博士後期課程

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 博士後期課程にあっては、所定の修業年限である3年以上在学し、必修科目12単位以上を修得し、必要な研究指導を受け、かつ、博士論文を提出した者について行う学位論文の審査及び最終試験に合格した者に、博士（学術）の学位を与える。
- (2) ただし、博士後期課程に2年以上在学し、所定の課程修了必要単位数を修得し、かつ、特に優れた研究業績を上げ、指導教員を含む3人以上の本研究科教授会構成員が推薦し、博士論文を提出した者について行う学位論文の審査（ルーブリック評価）及び最終試験に合格した者には、修業年限の特例により博士（学術）の学位を与える。
- (3) 博士後期課程修了に当たっては、以下の水準に到達していることを目安とする。
 - 1) それぞれの専門領域における高度な学識（専門的知識と見識）並びに研究技術を習得している。さらに、その学識と研究技術に基づいて独自に課題を設定し、それを解決・展開できる能力を身に付けている。
 - 2) 必要に応じて他の研究者及び研究機関との連携を図ることができる能力を身に付けている。
 - 3) 研究成果を国際的に公表するために必要な英語でのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力及び論文作成能力を身に付けている。
 - 4) 上記3点の能力を通じて、人と動物の健康社会に貢献する高度な専門性を持つ職業人、研究者及び教育者としての資質を備えている。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

- (1) それぞれの指導教員との討論のもと、自ら主体的に各分野の先端的な研究課題に取り組み、博士論文としてまとめる。これにより、課題解決方法、論理的思考、発展的な課題設定方法についてより深く学ばせる。
- (2) 研究成果を学内の課程博士論文中間発表会及び論文発表会で発表させるとともに、国内外の学会及び学術誌において発表することを支援する。これにより、日本語のみならず、英語を始めとする外国語でのプレゼンテーション及び質疑応答能力を養わせる。また、対外的な評価を受けることで、自己の研究能力を客観的に評価する機会を与える。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

博士後期課程では、博士前期課程で修得した幅広い視野に立って、より高度な専門性を持つ職業人、研究者及び教育者の養成を目指す。そのために次のような人物を求めている。

- (1) 動物応用科学に関連する諸科学の基礎知識を持ち、かつ、国際的な視点を持ち合わせている人
- (2) 動物応用科学に関する新たな知識の創造及び新技術の開発に取り組み、それによって人類と動物の福祉、社会の平和、生物としての共生並びに文化の進展に貢献しようとする意識のある人
- (3) 動物応用科学にとどまらず、新たな学際的な研究領域に果敢に挑戦しようとする意欲を持っている人

●動物応用科学専攻 分野・専攻科目と授業科目〈博士後期課程〉

分野	専攻科目	授業科目	単位数	分野	専攻科目	授業科目	単位数
動物生命科学	動物資源育種学	動物応用科学特別演習Ⅰ－Ⅰ	2	動物共生科学	動物行動管理学	動物応用科学特別演習Ⅵ－Ⅰ	2
		動物応用科学特別演習Ⅰ－Ⅱ	2			動物応用科学特別演習Ⅵ－Ⅱ	2
		動物応用科学特別研究Ⅰ－Ⅰ	2			動物応用科学特別研究Ⅵ－Ⅰ	2
		動物応用科学特別研究Ⅰ－Ⅱ	2			動物応用科学特別研究Ⅵ－Ⅱ	2
		動物応用科学特別研究Ⅰ－Ⅲ	4			動物応用科学特別研究Ⅵ－Ⅲ	4
	動物生殖科学	動物応用科学特別演習Ⅱ－Ⅰ	2		野生動物学	動物応用科学特別演習Ⅶ－Ⅰ	2
		動物応用科学特別演習Ⅱ－Ⅱ	2			動物応用科学特別演習Ⅶ－Ⅱ	2
		動物応用科学特別研究Ⅱ－Ⅰ	2			動物応用科学特別研究Ⅶ－Ⅰ	2
		動物応用科学特別研究Ⅱ－Ⅱ	2			動物応用科学特別研究Ⅶ－Ⅱ	2
		動物応用科学特別研究Ⅱ－Ⅲ	4			動物応用科学特別研究Ⅶ－Ⅲ	4
	動物工学	動物応用科学特別演習Ⅲ－Ⅰ	2		介在動物学	動物応用科学特別演習Ⅷ－Ⅰ	2
		動物応用科学特別演習Ⅲ－Ⅱ	2			動物応用科学特別演習Ⅷ－Ⅱ	2
		動物応用科学特別研究Ⅲ－Ⅰ	2			動物応用科学特別研究Ⅷ－Ⅰ	2
		動物応用科学特別研究Ⅲ－Ⅱ	2			動物応用科学特別研究Ⅷ－Ⅱ	2
		動物応用科学特別研究Ⅲ－Ⅲ	4			動物応用科学特別研究Ⅷ－Ⅲ	4
	比較毒性学	動物応用科学特別演習Ⅳ－Ⅰ	2		伴侶動物学	動物応用科学特別演習Ⅸ－Ⅰ	2
		動物応用科学特別演習Ⅳ－Ⅱ	2			動物応用科学特別演習Ⅸ－Ⅱ	2
		動物応用科学特別研究Ⅳ－Ⅰ	2			動物応用科学特別研究Ⅸ－Ⅰ	2
動物応用科学特別研究Ⅳ－Ⅱ		2	動物応用科学特別研究Ⅸ－Ⅱ	2			
動物応用科学特別研究Ⅳ－Ⅲ		4	動物応用科学特別研究Ⅸ－Ⅲ	4			
食品科学	動物応用科学特別演習Ⅴ－Ⅰ	2	動物資源経済学	動物応用科学特別演習Ⅹ－Ⅰ	2		
	動物応用科学特別演習Ⅴ－Ⅱ	2		動物応用科学特別演習Ⅹ－Ⅱ	2		
	動物応用科学特別研究Ⅴ－Ⅰ	2		動物応用科学特別研究Ⅹ－Ⅰ	2		
	動物応用科学特別研究Ⅴ－Ⅱ	2		動物応用科学特別研究Ⅹ－Ⅱ	2		
	動物応用科学特別研究Ⅴ－Ⅲ	4		動物応用科学特別研究Ⅹ－Ⅲ	4		
基礎生命科学	動物応用科学特別演習ⅩⅡ－Ⅰ	2	動物倫理・文化学	動物応用科学特別演習ⅩⅢ－Ⅰ	2		
	動物応用科学特別演習ⅩⅡ－Ⅱ	2		動物応用科学特別演習ⅩⅢ－Ⅱ	2		
	動物応用科学特別研究ⅩⅡ－Ⅰ	2		動物応用科学特別研究ⅩⅢ－Ⅰ	2		
	動物応用科学特別研究ⅩⅡ－Ⅱ	2		動物応用科学特別研究ⅩⅢ－Ⅱ	2		
	動物応用科学特別研究ⅩⅡ－Ⅲ	4		動物応用科学特別研究ⅩⅢ－Ⅲ	4		
備考	所属している専攻の特別演習と特別研究計12単位を必修とする。						
動物応用科学専攻 博士後期課程							
卒業要件（必要単位修得数）							
区分		単位数					
必修		12					
計		12					
※所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、学位論文審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。							
取得可能学位 博士（学術）							

6) 大学院環境保健学研究科

環境保健学研究科は、生命・環境科学部における教育・研究を基盤として、人を中心に、健康、食、環境の三つの要素を統合的かつ科学的に理解し、教育研究の展開を追求するため、深い学術的教育・研究を行うことを理念とする。この理念に基づき、環境保健学研究科は、人が健やかで安全に暮らせる社会の構築に貢献できる能力を有する人及び高度専門職業人を育成することを目的とする。

環境保健科学専攻博士前期課程の目的

環境保健学研究科の教育理念・目的に基づき、環境保健科学専攻では、高い倫理観を養うとともに、バイオサイエンスを取り入れた臨床検査技術学領域、食品健康科学領域及び環境科学領域における高度な専門知識と技術を備えた中堅の研究者、技術者又は統括指導者となるにふさわしい能力を養成することを目的とする。

●博士前期課程

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 博士前期課程の修了要件を満たしたもので、かつ食品科学、健康科学、環境科学の横断した分野および環境保健科学分野に関する専門的知識および学際的知識並びに研究能力をもち、関連する分野で中堅研究者、高度技術者になる能力をもつ。
- (2) 専門的知識や学際的知識および修得した研究能力が社会に及ぼす影響を理解して、倫理観を備え論理的かつ科学的に物事を判断することができる。
- (3) 臨床検査技術学と食品健康科学及び環境科学に関わる諸問題を総合的に解明する基礎的かつ応用的能力をもって、社会に貢献することができる。
- (4) 多様性のある社会において修得した専門的知識および学際的知識を総合的に活用して教育研究職等で活躍することができる。
- (5) コメディカルな分野において、中堅研究者、技術者として科学的根拠に基づいた正確な情報を伝達するためのプレゼンテーション能力や論文作成することができる。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

- (1) 専門分野の基礎となる幅広い知識を習得させるために、健康、食、環境分野の必修科目として開講されている授業科目の講義、実験及び実習を配置するとともに資格取得のためのプログラムを設置する。
- (2) 所属する専門分野において独創的研究を行うために「特別演習」及び「特別実験」を2年間にわたって配置する。
- (3) 修士号にふさわしい学識と倫理観を修得するため、共通科目として「アカデミック英語コミュニケーション」及び「科学者・研究者論」および他研究科の授業科目を配置する。
- (4) コメディカルな分野において、プレゼンテーション能力や論文作成能力を養うために、入学後、早期に1人の研究指導教員及び2人の副研究指導教員を決定し、研究計画から実施まで3人の指導教員により研究指導システムをおく。
- (5) 専門領域における研究者として社会的に活躍できる人材とするため、学内外の研究発表を積極的に推進するプログラムをおく。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

博士前期課程では、国の内外を問わず、またこれまでの大学・学部での専攻学科にとらわれず高い基礎学力と、将来に対する明確な目標とそれぞれの各研究分野に対して強い興味を持った人物を求めている。

- (1) 4年生大学卒業資格および同等の学力を有し、食品化学、健康科学、環境科学の横断した分野および環境保健科学に強い関心を持ち学習意欲に富んだ人
- (2) 社会人等でこれらの分野に関わる業務に就いており、さらに高度な専門性を身につけ、倫理観をもって社会に貢献する意思をもつもの
- (3) 食品科学、健康科学、環境科学の横断した分野および環境保健科学の研究課題に対し、解決しうる広範な知識を習得し、実践する意欲をもつもの

● 環境保健科学専攻 専門分野と開講授業科目（博士前期課程）

専門分野	授業科目	単位	専門分野	授業科目	単位
精神機能学	精神機能学特論	2	生活環境科学	生活環境科学特論	2
	精神機能学特別演習Ⅰ	4		生活環境科学特別演習Ⅰ	4
	精神機能学特別演習Ⅱ	2		生活環境科学特別演習Ⅱ	2
	精神機能学特別実験Ⅰ	6		生活環境科学特別実験Ⅰ	6
	精神機能学特別実験Ⅱ	8		生活環境科学特別実験Ⅱ	8
生体機能学	生体機能学特論	2	食品健康科学	食品健康科学特論	2
	生体機能学特別演習Ⅰ	4		食品健康科学特別演習Ⅰ	4
	生体機能学特別演習Ⅱ	2		食品健康科学特別演習Ⅱ	2
	生体機能学特別実験Ⅰ	6		食品健康科学特別実験Ⅰ	6
	生体機能学特別実験Ⅱ	8		食品健康科学特別実験Ⅱ	8
生体防御学	生体防御学特論	2	栄養疫学	栄養疫学特論	2
	生体防御学特別演習Ⅰ	4		栄養疫学特別演習Ⅰ	4
	生体防御学特別演習Ⅱ	2		栄養疫学特別演習Ⅱ	2
	生体防御学特別実験Ⅰ	6		栄養疫学特別実験Ⅰ	6
	生体防御学特別実験Ⅱ	8		栄養疫学特別実験Ⅱ	8
微生物学	微生物学特論	2	環境保健社会科学	環境保健社会科学特論	2
	微生物学特別演習Ⅰ	4		環境保健社会科学特別演習Ⅰ	4
	微生物学特別演習Ⅱ	2		環境保健社会科学特別演習Ⅱ	2
	微生物学特別実験Ⅰ	6		環境保健社会科学特別実験Ⅰ	6
	微生物学特別実験Ⅱ	8		環境保健社会科学特別実験Ⅱ	8
病理学	病理学特論	2	環境教育学	環境教育学特論	2
	病理学特別演習Ⅰ	4		環境教育学特別演習Ⅰ	4
	病理学特別演習Ⅱ	2		環境教育学特別演習Ⅱ	2
	病理学特別実験Ⅰ	6		環境教育学特別実験Ⅰ	6
	病理学特別実験Ⅱ	8		環境教育学特別実験Ⅱ	8
分子病態解析学	分子病態解析学特論	2	共通科目	◎アカデミック英語コミュニケーション	2
	分子病態解析学特別演習Ⅰ	4		◎科学者・研究者論	2
	分子病態解析学特別演習Ⅱ	2		※環境調査演習	2
	分子病態解析学特別実験Ⅰ	6		※質的調査演習	2
	分子病態解析学特別実験Ⅱ	8		※多変量解析演習	2

備考

◎印：全ての学生にとって必修科目となる。（4単位）

自己の所属する専門分野の科目は、全て必修とする。（22単位）

それ以外に、選択科目として他の専門分野の特論科目及び獣医学研究科動物応用科学専攻博士前期課程の特論科目（動物応用医学特論は除く）から2科目以上を選択して、合計30単位以上を修得する。

※印：専門社会調査士の資格を取得するためには、単位修得が必要な科目となる。（6単位）ただし、修了要件には含まない。

麻布大学学則第34条の2に基づいて早期履修した授業科目のうち、選択科目として単位に充当できない授業科目は、自由科目として単位に充当する。

環境保健科学専攻 博士前期課程

卒業要件（必要単位修得数）	
区分	単位数
必修	26
選択	4
計	30

※所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、学位論文審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。

取得可能学位 修士（環境保健科学）

環境保健科学専攻博士後期課程の目的

博士前期課程で修得した知識と技術を更に向上させ、独創性の高い研究能力を培い、関連する分野で自立した研究者、指導者となるに相応しい能力を養成することを目的とする。

●博士後期課程

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

- (1) 博士後期課程の修了要件を満たしたもので、かつ食品科学、健康科学、環境科学の横断した分野および環境保健科学分野に関する専門的知識および学際的知識並びに独創性の高い研究能力をもち、関連する分野で自立した研究者、高度技術者および総括指導者になる能力をもつ。
- (2) 専門的知識や学際的知識および修得した研究能力が社会に及ぼす影響を理解して、十分な倫理観を備え論理的かつ科学的に物事を判断することができる。
- (3) 自立した研究者、技術者として総括指導能力が求められる環境において、目標を明確にし、社会に貢献することができる。
- (4) 多様性のある社会において修得した専門的知識および学際的知識を総合的に活用して、社会の発展と人々の健康のために科学者、研究者として責任ある行動をとることができる。
- (5) コメディカルな分野において、総括的研究指導者として科学的根拠に基づいた正確な情報を伝達するためのプレゼンテーション能力や論文作成することができる。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

- (1) 更に高度な専門的知識を習得させるため、健康、食、環境分野の応用知識及び学際的分野の幅広い知識を、特論として配置するとともに資格取得のためのプログラムを設置する。
- (2) 所属する専門分野において独創的研究を行うために「特別演習」及び「特別実験」を3年間にわたって配置する。
- (3) コメディカルな分野において、総括的研究指導者として優れたプレゼンテーション能力や論文作成能力を養うために、入学後、早期に1人の研究指導教員及び2人の副研究指導教員を決定し、3人の指導教員による総合的で綿密かつ高度な研究指導システムをおく。
- (4) 専門領域における研究者として国際的に活躍できる人材とするため、学内外の研究発表を積極的に推進するプログラムをおく。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

博士後期課程では、環境保健学研究科の理念・目的を達成するために、次のような資質を持つ人材を求めている。

- (1) 食品科学、健康科学、環境科学の横断した分野および環境保健科学に関連する諸科学の修士号を取得したもの又は同等の知識学力を有するもの。
- (2) 食品科学、健康科学、環境科学の横断した分野および環境保健科学の研究領域に関する深い探求心を持つもの
- (3) 食品科学、健康科学、環境科学の横断した分野および環境保健科学の研究課題に対し、研究者として高い倫理観を持ち、論理的な思考を持って解決することができるもの
- (4) コメディカルな分野において高度専門職業人としての意識も持ち、国内外問わず広い視野を持って高度な研究者、技術者あるいは総括指導者として活躍したいもの

●環境保健科学専攻 専門分野と開講授業科目〈博士後期課程〉

専門分野	授業科目	単位	専門分野	授業科目	単位
精神機能学	精神機能学特別演習Ⅰ	2	生活環境科学	生活環境科学特別演習Ⅰ	2
	精神機能学特別演習Ⅱ	2		生活環境科学特別演習Ⅱ	2
	精神機能学特別実験Ⅰ	4		生活環境科学特別実験Ⅰ	4
	精神機能学特別実験Ⅱ	2		生活環境科学特別実験Ⅱ	2
	精神機能学特別実験Ⅲ	2		生活環境科学特別実験Ⅲ	2
生体機能学	生体機能学特別演習Ⅰ	2	食品健康科学	食品健康科学特別演習Ⅰ	2
	生体機能学特別演習Ⅱ	2		食品健康科学特別演習Ⅱ	2
	生体機能学特別実験Ⅰ	4		食品健康科学特別実験Ⅰ	4
	生体機能学特別実験Ⅱ	2		食品健康科学特別実験Ⅱ	2
	生体機能学特別実験Ⅲ	2		食品健康科学特別実験Ⅲ	2
生体防御学	生体防御学特別演習Ⅰ	2	栄養疫学	栄養疫学特別演習Ⅰ	2
	生体防御学特別演習Ⅱ	2		栄養疫学特別演習Ⅱ	2
	生体防御学特別実験Ⅰ	4		栄養疫学特別実験Ⅰ	4
	生体防御学特別実験Ⅱ	2		栄養疫学特別実験Ⅱ	2
	生体防御学特別実験Ⅲ	2		栄養疫学特別実験Ⅲ	2
微生物学	微生物学特別演習Ⅰ	2	環境保健 社会科学	環境保健社会科学特別演習Ⅰ	2
	微生物学特別演習Ⅱ	2		環境保健社会科学特別演習Ⅱ	2
	微生物学特別実験Ⅰ	4		環境保健社会科学特別実験Ⅰ	4
	微生物学特別実験Ⅱ	2		環境保健社会科学特別実験Ⅱ	2
	微生物学特別実験Ⅲ	2		環境保健社会科学特別実験Ⅲ	2
病理学	病理学特別演習Ⅰ	2	環境教育学	環境教育学特別演習Ⅰ	2
	病理学特別演習Ⅱ	2		環境教育学特別演習Ⅱ	2
	病理学特別実験Ⅰ	4		環境教育学特別実験Ⅰ	4
	病理学特別実験Ⅱ	2		環境教育学特別実験Ⅱ	2
	病理学特別実験Ⅲ	2		環境教育学特別実験Ⅲ	2
分子病態解析学	分子病態解析学特別演習Ⅰ	2			
	分子病態解析学特別演習Ⅱ	2			
	分子病態解析学特別実験Ⅰ	4			
	分子病態解析学特別実験Ⅱ	2			
	分子病態解析学特別実験Ⅲ	2			

備考

上に掲げた授業科目のうち、自己の所属する専門分野の科目は、全て必修（12単位）とする。

環境保健科学専攻 博士後期課程

卒業要件（必要単位修得数）	
区分	単位数
必修	12
計	12

※所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、学位論文審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。

取得可能学位 博士（学術）